

【9】流れの正面に立つな！

長崎県島原半島の火山、雲仙普賢岳は、平成 2 年 11 月（1990 年）に約 200 年ぶりに噴火を始め、翌年 6 月に発生した大規模な「火砕流」のため、40 名以上の死者を出しました。

火砕流というのは、火山の火口から噴火に伴い噴出する噴煙と火山灰などの物質の混合した高温の流体状のもので、山腹の斜面に沿って重力の作用の下に、高速で流下し、行手の樹木や家屋を焼き尽くす恐ろしい現象です。現象としては百年以上前から断片的に知られていましたが、現象の全貌と名称が普賢岳の災害で確定しました。1 ヶ月ほど前から小規模な火砕流が繰り返し発生し、その迫力ある光景にメディアの関心も高まり、普賢岳を正面に見て、なだれ落ちてくる火砕流を正面から写せる小高い台地は、絶好の撮影スポットとして人気の場所だったのです。不幸なことに、通常の土石流ならば避けられる土地であっても、水を含まない噴煙状の軽い火砕流はいとも簡単に乗り越え、下流へ流下していきました。結果として、大勢の報道関係者とその警戒に当たる機動隊員、消防団員等が巻き込まれ多数の死者を生じてしまいました。後知恵になりますが、火砕流の流下方向の正面で観察するというのは全く不適切な行動であったといわざるを得ません。

話は変わりますが、昭和 46 年 11 月（1971 年）に、神奈川県川崎市の台地斜面に発生した土砂崩壊に巻き込まれて、報道関係者を中心に 15 名の方が亡くなるという事故がありました。あえて事故と申したのは、実はこの土砂崩壊は自然の災害ではなく、野外の現地試験として人工的に引き起こされたものだったのです。当時の（旧）科学技術庁の附属機関である国立防災科学技術センターが企画して（旧）建設省土木研究所など計 4 機関の共同実験だったのです。川崎市内の台地の斜面に放水し、人為的に斜面崩壊を発生させ、そのメカニズムを研究しようという計画だったのです。結果として、想定以上に規模の大きい崩壊が発生し、水と混じって一種の泥流となり、崩壊斜面の下流方向の見学場所を襲ったのです。実験は報道関係者に公開されていたので、記者やカメラマンも大勢いて被害が大きくなりました。

以上、2 件に見るように、大きなエネルギーと破壊力を秘めた自然界の“流れ”に正面から立ち向かうのは無謀というべきです。無理して正面から観察しなくても観測機器や自動カメラにまかせ、人間は一步脇に除けて斜めから見れば良いのです。